

土木技術者、土木遺産を通じた国際交流、観光振興の可能性について

—台湾と北海道の交流を例に—

北海道開発局開発監理部開発計画課

○宮藤 秀之

台湾で烏山頭ダムを建設した八田與一と北海道で夕張川新水路を建設した保原元二は、ともに、小樽港を建設した近代土木の父、廣井勇博士門下の同窓生である。また、八田與一とともに台湾の農業の発展に尽くした宮地末彦は終戦後日本に戻り、北海道開発局網走開発建設部の初代部長となっている。本稿ではこれら先人の業績をたどりながら、我々の業務である社会資本整備の意義を改めて考えるとともに、土木技術者、土木遺産が国際交流、観光振興などに貢献する可能性について考察する。

キーワード：土木遺産、北海道開発、北海道学

1. はじめに

私たちの目の前にある風景は決して150年前からそのような様相だったわけではない。北海道の開拓はわずかに150年足らずの歴史であり、開拓当初は原生林、原野が広がっていたことは容易に想像できる。先人たちはこの原生林、原野を開拓、開発し、現在のような社会を築いた。その一翼を担ったのは、北海道開発に携わった当時の北海道庁であり、その後の北海道開発局の職員、つまり我々の諸先輩である。

現在、筆者も含め、社会資本整備に携わる人間が、自らの仕事に対する誇りに満ちあふれているとは言えない状況にある。何のために社会資本を整備しているのか。我々の使命とは何か。そのことを考える上で、先人たちはどのようなことを行ってきたのかを調べ、知ることは決して無駄ではない。

また、近年、国際交流、インバウンド観光の振興が言われているが、我々の進めてきた社会資本整備の歴史を学ぶ中で、これらに資するものがあると考えられる。本稿ではこのことについても考察を行うこととする。なお、本稿においては一部敬称を省略しているのでお許しいただきたい。

2. 八田與一について

八田與一は戦前に台湾で烏山頭ダムを含む壮大な水利システムである嘉南大圳（かなんたいしゅう）を建設し「嘉南大圳の父」とよばれる土木技術者であり、台湾で最も有名な日本人といわれている。嘉南大圳は、干ばつ、

洪水、塩害の3重苦のためまともな作物がつかれなかった嘉南平野を一大農業地帯に変え、工事費を3ヶ年で回収できるほど農作物は増収となり、農地の地価は3倍になり、大きな経済効果を生んだと言われている。その功績の偉大さは台湾で地元の人々により毎年慰霊祭が開かれていることでもうかがうことができる。

また烏山頭ダムは現在においても珍しい「セミ・ハイドロリック・フィル工法」という工法で構築されており、日本の土木学会選奨土木遺産となっている。

参考文献¹⁾によれば、東京帝国大学工学部で廣井勇教授のもと土木を学んでいた八田は、「八田に内地は狭すぎる。内地にいれば狭量な人間に疎んぜられるようになる。八田を生かすには、外地で仕事をさせるのが一番ではないか」との周囲の声を受け、台湾勤務を志したとのことである。

石川県金沢市出身の八田は、郷土の誇りとして金沢ではつとに有名である。八田の通っていた金沢市立花園小学校の前の道は「與一の道」と名付けられている。ちなみに烏山頭ダムにある八田與一記念公園近くの道路は「八田路」と名付けられている。

その人柄を示すエピソードは数多いが、烏山頭ダムの竣工に当たり、殉職者のための慰霊碑を建設することとなった際、その慰霊碑に名前を刻む際に日本人、台湾人の区別なく死亡順に並べるよう指示したと言われている。仏様の前では皆平等であるという仏教的思想が表れているとの指摘がある。また、ダムの建設工事に携わる職員・作業員の宿舎を建てる際は、家族と共にあることで安心して良い仕事ができる、との信念から当時の予算担当の反対を押し切って、ダムのそばに、必ず家族と一緒に住めるような宿舎を設計したという。

現在、烏山頭ダム湖（その形状から、珊瑚潭と呼ばれている）のほりにある八田の銅像もまた特徴的である。八田を慕う人々が銅像を建てるべく本人に伺いをたてたところ、当初固辞したが、最後に「正装し、威厳に満ちた顔つきで高い台の上にそびえ立つような銅像にだけはしてほしくない。」との条件付きで承諾され、この種の銅像としては珍しく「座って頭を掻いている」像となった。八田が課題を抱えた際に土手に腰を下ろし、考え事をしている時の姿とのことである。

八田は嘉南大圳の完成後、南方開発派遣要員として綿作かんがい指導のため、3人の部下と共にフィリピンに向かう大洋丸に乗船した際、五島沖でアメリカの潜水艦の攻撃に遭い死亡している。この日が昭和 17 年 5 月 8 日である。

烏山頭ダムのほりにある銅像を前に、毎年 5 月 8 日に烏山頭ダムや嘉南大圳を管理している嘉南農田水利会（日本でいう土地改良区に相当）主催による慰霊祭が行われている。地元の農家や首長、そして日本から関係者など総勢 400 人以上が参加する一大行事となっている。日本と台湾の交流の証でもあり、過去には台湾の総統や日本の総理経験者なども参列したこともある。このように、八田という土木技術者、烏山頭ダムという土木遺産が国際交流、観光振興に寄与している。

3. 保原元二について

保原元二は宮城県仙台市出身で、明治 43 年に東京帝国大学を卒業後、廣井勇教授の「仕事のし甲斐ある場所を望むなら北海道へ行け」²⁾ という奨めに応じ、北海道庁に就職し、昭和 12 年に退職するまで、一貫して夕張川の改修計画及び工事に携わり、「夕張川治水の父」と呼ばれる土木技術者である。改修前の夕張川は千歳川に合流しており、毎年のように洪水を引き起こしてきた。洪水時に水位が高くなると川の両岸にそれぞれの住民が集まり様子を固唾をのんで見守り、対岸の堤防が切れると切れていない側の住民が思わず「バンザイ」を繰り返すという、バンザイ堤防と呼ばれる状況が、ほんの 100 年前にあったのである。

保原元二はこの状況を抜本的に改良すべく、夕張川の新水路（ショートカット）の計画及び工事に 27 年間に渡って携わり、完成させた。その状況は参考文献³⁾ に詳しいが、地域住民の立場にたち、課題を解決するという保原の一貫した姿勢が記されている。エピソードをあげると、工事が進捗し、新水路への通水が迫ったある日、大雨となった。夕張川の水位が上がる中、住民たちは勝手に新水路の「土留め」を切り欠いて新水路に緊急通水をしてしまった。当然施工機械等は水没してしまったのだが、保原はこれを「お答めなし」としたという。

夕張川新水路の通水後は周辺農地からの収量は増加し、

わずか 5 年で切り替え工事費が回収されるほどであったという。また、夕張川新水路は烏山頭ダムと同様、土木学会の選奨土木遺産に選ばれており、保原の栄誉を称え感謝する式典として、地元の南幌町では 7 月 1 日に治水感謝式が、長沼町では 7 月 2 日に水祭りが毎年地域住民により行われている。

この保原と八田は、東京帝国大学の廣井勇門下の同期生であるが、このことを発見したのは長沼町の八田與一研究者である山崎晋氏⁴⁾ である。台湾の八田與一墓前祭に何度となく参加している山崎氏は、平成 26 年、長沼町「水祭り」に台湾の八田與一文化芸術基金会の徐金賜会長や八田與一の孫である八田修一氏を長沼町に招き交流会を開催している。北海道の開発の歴史における土木技術者や土木遺産が、国際交流、インバウンド観光に資している例といえる。

4. 宮地末彦について

宮地末彦は、八田と同じく石川県金沢市出身で、東京帝国大学農学部を昭和 6 年に卒業後、八田の部下として台湾にて嘉南大圳の建設やその後の管理にあたり、また八田とともにフィリピンに向かう大洋丸に乗船していたが、奇跡的に一命を取りとめた一人である。その後、嘉南大圳の管理に当たっていたが終戦後日本に帰国している。

帰国後中国地方農政局に勤務していたが昭和 26 年 8 月に初代網走開発建設部長として赴任し、その後、昭和 29 年 7 月に本州に異動となる。ダムに造詣が深く、旭川の当麻ダムの建設についても助言を行っていたとの記録⁵⁾ がある。また、当時の新聞のインタビュー⁶⁾ では、異動にあたって思い出に残る仕事の一つとして、網走開発建設部庁舎の新築を挙げている。なお、当時の庁舎は改築を経て現在でも使用されており、現存する最も古い開発建設部庁舎である。また別の新聞インタビュー記事⁷⁾ では網走開発建設部長という立場で網走の印象について一言、という質問に対して「まず頭の切り替え、北見と対立しているようじゃ問題じゃない、北見市を眺めたって現在以上農村の発達を期待できない、網走だって港湾を整備して貿易をやる将来性があったにしてもバックグラウンドがない、だから北見市は網走市を玄関に、網走は北見市を売り捌き先として協力しなけりゃいかん、これなくして発展策はないと思う」という発言をしている。70 年前の発言であるが、現在の状況に照らしても、興味深いものである。

また、当時の宮地の部下であり、現在網走市に在住している樋口和夫氏にお話を伺うことができ、いくつかのエピソードを教えていただいた。樋口氏は実は終戦前に台湾で宮地氏と仕事をしたことがあったが、終戦後、北海道に戻り斜里町で定職につかず臨時の仕事などをしていたところ、たまたま網走開発建設部長の宮地が斜里町に寄

った際、樋口氏を見つけ、「何でおまえがここにいる」という話から、網走開発建設部の臨時職員になり、その後正式に採用されたそうである。樋口氏曰く、「宮地さんは私の恩人です」とのことであった。

宮地末彦の御子息である宮地利彦氏とは、筆者と平成26年の八田與一墓前祭で同席したことがきっかけで、網走開発建設部長であったことなど、北海道とのつながりが明らかとなった。宮地利彦氏も幼少期を網走で過ごしており当時のことはよく覚えているという。参考文献の随筆⁸⁾にも御子息に関する記載がある。

5. 土木遺産を通して台湾と北海道の交流を深める

ツアーについて

筆者はこのような北海道と台湾のつながりを踏まえ、有志と共に「土木遺産を通して台湾と北海道の交流を深めるツアー」(表-1)を平成27年に企画した。実行委員長には烏山頭ダムを始め、台湾の産業遺産に詳しい酪農学園大学教授の山田大隆氏に就任いただいた。ツアーは5月8日の八田與一墓前祭参列をメインとした千歳発着の4泊5日の行程である。見学コースの設定や案内パンフレットの作成、参加者の募集など、慣れない点が多かったが、土木学会北海道支部の後援を受け、京王観光札幌支店の協力を得て無事催行された。非常に充実したツアーとなり、参加者には大変な好評(図-1)をいただいた。印象深かった点を何点かあげると、台湾にて、石川県金沢の八田技師夫妻を慕い台湾と友好の会、八田與一の孫である八田修一氏、嘉南農田水利会、八田與一芸術基金会との交流が図られ、今後は台南、金沢、北海道の3地点でそれぞれ交流を深めていこうとの提案がなされ、大きな賛同を得たこと、また、嘉南農田水利会の協

力で烏山頭ダム堤体内部への立ち入ることができたこと、お米の品種改良に携わり「蓬莱米の父」といわれた北海道大学出身の磯永吉記念館(台湾大学の学内)を訪問することができたこと、ツアー参加者である料理研究家の星澤幸子氏と交流できたことなどがあげられる。

なお、「土木遺産を通して台湾と北海道の交流を深めるツアー」については平成28年も催行予定である。

表-1 土木遺産を通して台湾と北海道の交流を深めるツアー行程表

土木遺産を通して台湾と北海道の交流を深めるツアー日程表(予定)

日 程	都市名	時間	行 程
[1日目] 2015年 5月6日 (水)	新千歳空港	14:00	新千歳空港国際線エバー航空カウンター前集合(添乗員がお待ちしています)
	新千歳空港 台北(桃園)	16:00 19:10	■空路、BR116便にて台北へ 到着後、士林夜市へ。観光後ホテルへ移動。 お食事【朝:× 昼:× 夕:機内】 台北/★シーザーパークホテル宿泊(デラックスクラス)★
[2日目] 2015年 5月7日 (木)	台北	午前	ホテルにて朝食後観光へ ◆総統府内部見学 見学後、新幹線にて台南へ移動
	台南	午後 19:00頃	◆嘉南農田水利会表敬訪問 ◆台南博物館 日本人ツアー参加者主催による食事会 お食事【朝:ホテル 昼:弁当 夕:×】 台南/★ランディスホテル宿泊(デラックス)★
[3日目] 2015年 5月8日 (金)	台南	午前	ホテルにて朝食後観光へ
		午後 18:00頃	◆烏山頭ダム(管理棟・水門)・八田與一記念公園見学 ◆八田與一慰霊祭出席 嘉南農田水利会主催の晩餐会出席 お食事【朝:ホテル 昼:× 夕:×】 台南/★ランディスホテル宿泊(デラックス)★
[4日目] 2015年 5月9日 (土)	台南 台北	午前	ホテルにて朝食後、新幹線にて台北駅へ
		午後 夕刻	◆台湾大学内「磯永吉記念館」見学 ◆故宮博物院見学 ◆九份観光 お食事【朝:ホテル 昼:× 夕:○】 台北/★シーザーパークホテル宿泊(デラックスクラス)★
[5日目] 2015年 5月10日 (日)	台北 台北(桃園) 新千歳空港	早朝 10:10 15:00	チェックアウト後、専用車にて空港へ移動 ■空路、BR116便にて新千歳空港へ 到着後、解散。5日間たいへんお疲れさまでございました。 食事【朝:ホテルor BOX形式 昼:機内 夕:×】

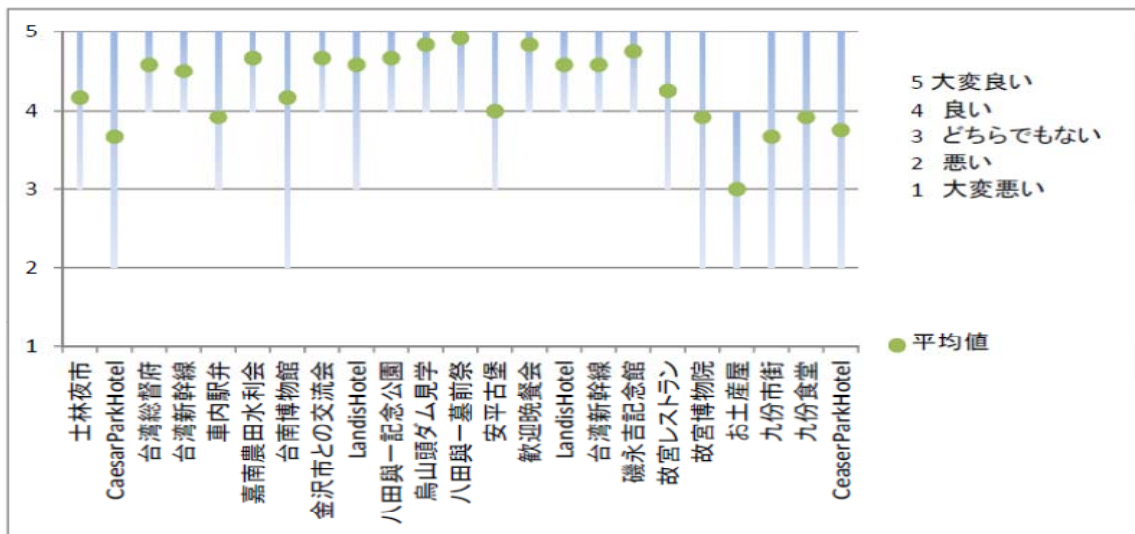


図-1 ツアー参加者アンケート結果

6. まとめ

以上のとおり、3人の土木技術者や関連する土木遺産についてその歴史をたどることにより、彼らの努力や偉大さ、その功績を改めて知ることができた。人々から尊敬され続ける彼らの社会資本整備により、今の社会があることを、我々現代の土木技術者が理解し、伝えていくことが必要である。

また、訪日外国人来道者は平成26年度に154万人を数え、北海道においてもインバウンド観光が脚光を浴びている。しかし、この動きを長続きさせ、確実なものにしていくためには以下の2点が重要ではないかと考えている。

一つ目は、アウトバウンドの重要性である。来道を待つだけでなく、北海道からも積極的に海外に行く必要があるのではないかと、ということである。台湾を例に挙げると、台湾からの来道者は年間30万人いるのに対し、北海道から台湾への訪問者は3万人とのことである。これではいわゆる片荷輸送の状態であり、飛行機の定期的な就航への障害となりうる。現在の国際線LCCの発着は成田、関空が中心であるが、ニーズがあれば新千歳空港や旭川空港と海外への定期的な就航なども可能になるのではないかと。そのためにも北海道民が内向きにならずに、海外へ積極的に足を運ぶ必要がある。

二つ目は、人同士の交流が重要であるということである。いくら良い景色、おいしい料理があったところで、1度か2度経験してしまえば飽きてしまい、他の場所へ行きたくなるものである。しかし、あの人に会う、あの

人たちと交流する、ということであれば興味は尽きることはなく、深まるばかりである。その際、尊敬する土木技術者や優れた土木遺産は、言葉を越えた交流のための有効なツールとなると考えている。

このようなことから、我々の実施した台湾へのツアーや台湾からの来道者との交流は意義深いものと考えており、さらに交流を広げていく必要がある。

そのためには、我々土木技術者は、もっと北海道のこと、北海道の土木の歴史、北海道を支えた多くの人のことを知り、子供たちを含めた多くの人々に伝える必要がある。それは我々の責任であると感じている。そのことが、現在、第8期北海道総合開発計画に示される「北海道学」の重要性だと理解している。北海道学は誰かが教えてくれるものではなく、自ら調べ、自ら作り、自ら伝え、共有すべきものとする。今後とも、我々が北海道学をすすめていくことが重要である。

謝辞：本稿に記載された内容は、中川耕二氏、山崎晋氏、八田修一氏、樋口和夫氏、宮地利彦氏、その他多くの関係者のご協力によるものである。記して謝意を示す。

参考文献

- 1) 古川勝三：台湾を愛した日本人
- 2) 森田義育：西の宮清談
- 3) 伊藤兼平：小説治水
- 4) 財団法人記念八田與一文化芸術基金会：南北ウオーターシルクロードの物語
- 5) 農業土木学会：農業土木学会第59巻
- 6) 網走新報社：網走新報昭和29年5月25日版
- 7) 網走新聞社：網走新聞昭和27年5月17日版
- 8) 北海道開発局：北海道開発局十五年小史